

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	イーリアスにおけるアスペクトに関する一考察： 比喩表現に見出される直説法アオリストについて
Author(s)	竹島, 俊之
Citation	ニダバ, 7 : 50 - 51
Issue Date	1978-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050985
Right	
Relation	



イーリアスにおけるアスペクトに関する一考察
 —— 比喩表現に見出される直説法アオリストについて ——

竹 島 俊 之

古代ギリシア語では時間関係は専ら直説法においてのみ表現され、それ以外の法、たとえば接続法、希求法などでは主としてアスペクトの区別のみが行われている。

しかしながら、比喩表現では直説法が使われている場合でもそうした時間概念が再び解消され、アスペクトの面だけが浮き彫りにされてくると考えられる。

eūt' óreos koruphēisi Nótos katekheuen (aor) omíklēn
 poimésin ou ti philēn, kléptēi dé te nuktōs ameínō,
 tōsson tīs t' epileússei (pr), hōson t' epì lāan hīēsín (pr)
 hōs ára tōn hupò possi konísalos órnut' aellēs ■ 10 - 13

「さながら山の峰々へかけ、東南風がもやを一面に注ぎかけるよう。牧人達にはまったくありがたい。だが盗賊には夜より都合がいいもの。そして石を投げて届くくらいしか、見通しがきかない。それほどひどく軍勢の足もとから、砂煙が空へと舞い上った。」

この研究発表で目指そうとするのは、比喩表現において特に異様な印象を与える直説法アオリストについて、それが使用されている条件を記述し、それを糸口としてギリシア語のアスペクトを考察していくこととするものである。

比喩文を先ず(1)ēuteの型、(2)hōs dè, hōs tèの型、(3)hōs te + 名詞 + 関係代名詞の型、(4)hōs hôteの型に分類し、それぞれの型の中で、個々の動詞を検討していく。

(1)の型は上述の例以外に II 455 - 456, II 467 - 471, XV 618 - 621に見出されるが、■ 10の katekheuen 以外はすべて直説法現在である。この katekheuen というアオリスト形式は(3)の型でも VII 156に見出される。この型ではそれ以外に接続法現在、接続法アオリスト、直説法現在が見出される。そして VII 305 - 306に見出されるアオリスト形式は典型的状況を述べる場合の直説法アオリスト、即ち現在形で、あるいは未来形で与えられる前提に直接続いて起こる事柄を述べる形式で、しばしば現在形で、あるいは未来形で翻訳することのできるきわめてギリシア語に特徴的なアオリストの用法の一つと見なすことができる。

このように整理した場合、比喩表現における katekheuen という形式は katakhein という動詞概念とアオリストというアスペクト範疇がきわめて緊密に結びついているためとあるいは考えることができる

かもしれない。

E. Schwyzer : Griechische Grammatik II 281 - 286 に詳述されている理論に即しつつ、きわめて多くの問題性をはらんでいる比喩表現における直説法アオリストの用法について、作品全体を見渡しつつ、再検討して行きたい。